

ウクライナとベラルーシ

—ロシアの個性豊かな2人の「弟」—



ウクライナのコサック反乱を描いたオペラ「ボグダン・フメリニツキー」／著者撮影

はじめに

ウクライナとベラルーシをロシアの「弟」と呼んだら、^{まゆ}眉をひそめる向きもあるかもしれない。「ウクライナ人とベラルーシ人はロシア人とは別個の民族だ」、「『弟』という表現は目下のように失礼ではないか」、「そもそもルーシはキエフから発祥したのだからウクライナこそが長兄なのだ」といった声が聞こえてきそうである。

まあ、ここでは堅いことを言うのはやめよう。ロシア人・ウクライナ人・ベラルーシ人は同じ東スラヴ系の3民族であり、国の規模からいえばロシア>ウクライナ>ベラルーシという順番なのだから、ウクライナが次男坊、ベラルーシが三男坊ということでお許しいただきたい。というわけで、今回は、ロシアの個性豊かな2人の「弟」について、講釈を述べてみよう。

なお、両国については、私のホームページ*「ロシア・ウクライナ・ベラルーシ探訪」で多くの情報を発信しているので、ご関心の向きはチェックしていただきたい。また、特にベラルーシについては、拙著『不思議の国ベラルーシ—ナショナリズムから遠く離れて』もご参照いただければ幸いである。

*<http://www.hattorimichitaka.com>



ウクライナってどんな国？

NHKの番組から発信されて大ヒットした「だんご3兄弟」という歌を覚えておられるだろうか。その歌詞に、「自分がいちばん次男」という一節が出てくる。私は、これを聞くと、どうしてもウクライナのことを連想してしまう。つまり、東スラヴ3兄弟で一番、自由奔放で気ままなのが、次男坊のウクライナだという印象があるのだ(もっとも、長男のロシアが、歌にあるように、「弟想い」であるかどうかは微妙だが……)。

社会主義の超大国ソ連邦は、1991年の暮れに崩壊し、これに伴いウクライナやベラルーシといった国々も独立国家となった。実は、その際に決定的な役割を果たしたのが、ウクライナの動きだったのだ。この年の12月1日、ウクライナで独立の是非を問う国民投票が行われ、9割以上の投票参加者がソ連からの独立に賛成した。ウクライナ抜きでソ連邦は存在しえないので、これによりソ連邦に引導が渡された形になったのである。

ウクライナの人々がこの時点で独立を支持したのにも、道理があった。ウクライナは約5,000万もの人口を抱え、ヨーロッパの尺度では「大国」としてのポテンシャルを秘めている。肥沃な農地に恵まれ、鉄鋼業などの産業も発達している。ソ連(≒ロシア)という呪縛から逃れさえすれば、我々は豊かで偉大な国になれるはずだと、ウクライナの人々は考えたのだ。

今日に至るまで、ウクライナという国を特徴づけているのは、やや過剰気味の自信と、ロシアへの強い対抗意識である。欧州連合(EU)に加入し、ヨーロッパの仲間入りを果たすというのが、ウクライナ政府の公式的な立場である。しかし、政府の幹部が表向き立派なことを言っても、現実のウクライナは多分に、腐敗し混乱した国であると言わざるをえない。

ウクライナといえば、「コサック」を連想する人も多いであろう。実際、コサックは、ウクライナの民族形成史を語るうえで、欠かせないテーマである。コサック気質によるものか、ウクライナの国民性には自由・独立性を好む気風がある。その点、強い指導者による絶対的な支配を志向するロシア国民よりも、民主化の素地はあると言えるかもしれない。ただ、ウクライナの場合、自由の副作用として、地域的な対立や、利権追求などがむき出しになり、政治がなかなか安定しない。



何やらネガティブなことばかり書いてしまったが、これはあくまでも国民・民族という集団としての彼らについての私の主観的な評価である。一人一人のウクライナ人はもちろん善良で愛すべき人々である。

対照的な末っ子ベラルーシ

自己主張の強いウクライナ人に比べると、ベラルーシ人はずいぶんと物腰が柔らかく、控えめである。「ベラルーシ人」という民族的な自意識は弱かったのも、ソ連時代にも独立を求めるような動きはまったく生じなかった。むしろ、「ソビエト人」として生きることに満足していたのである。

したがって、ソ連邦崩壊に伴う独立は、多くのベラルーシ住民にとって悲願の達成というよりは、突然降りかかった災厄のようなものだった。そうした背景から、1994年に初めて実施された大統領選挙で人々は、ロシアとの国家統合を大衆迎会的に訴えるルカシェンコ氏を選択したのである。

それ以来、ルカシェンコ氏が14年間にわたって大統領の座にある。ルカシェンコは次第に強権的な体質を強め、いつしか「欧州最後の独裁者」の称号を冠するようになった。ロシアとの統合という公約は有名無実化して久しいものの、クレムリンとしてもベラルーシを切り捨てるわけにはいかないのも、ロシアの庇護の下でルカシェンコ政権の反動路線がずるずると続いている。それでも、従順なベラルーシ国民は、ルカシェンコ政権打倒のために立ち上がろうとはしていない。狼1匹と、あとは子羊の群れという図式だ。

外国人からすると、「何でベラルーシ人はこんなにおとなしいんだ？」とイライラさせられることもある。ただ、やはり素直で勤勉な当国の国民性には、好感を覚えることの方が多いただろう。資源に恵まれていない分、モノづくりの精神を備えているので、特に日本人は共感を抱きやすい。

気になる言語事情は？

ウクライナにはウクライナ語という、ベラルーシにはベラルーシ語という、れっきとした民族語がある。しかし、それらはロシア語と近く、ソ連時代にロシア語化が推進されたことから、両国が独立した時点で、都市部を中心に、多くの住民がロシア語に移行していた。特に、ベラルーシはソ連の15共和国の中で、最も民族語が廃れた共和国となった。

ウクライナでは、今日も国の東部は圧倒的にロシア語圏であり、首都キエ

フでも日常会話ではまだロシア語が若干優勢な印象である。それでも、ウクライナ語が唯一の「国家言語」であるということが憲法でうたわれているので、公式的な場面では必ずウクライナ語が使われるし、教育もウクライナ語によるものが基本である。長期的に見れば、ウクライナ語の優位が強まっていく方向であろう。ただ、私などは仕事柄、ウクライナの統計や法律が全部ウクライナ語になっていて困ることがよくあり、英語かロシア語を併記してほしいなと感じることが多い。

一方、ベラルーシでは1995年の国民投票の結果、ロシア語がベラルーシ語と並ぶ国家言語になった。旧ソ連諸国で、ロシア語が民族語と完全に同格になっている国は、ベラルーシだけである。しかも、都市の日常生活では、完全にロシア語が優勢だ。外国人が、ロシア語を勉強するために、ベラルーシに留学するというようなことも、十分にありうる選択肢である。

ただ、実際の言語状況は、この人は民族語、この人はロシア語というように、明快に割り切れるものではない。ほとんどの人は、上手い・下手は別として、民族語とロシア語の両方を操ることができる。普段から、相手や状況に応じて、両者を意識的に使い分けている人も少なくない。

もう一つの問題は、ロシア語・ウクライナ語・ベラルーシ語のように近い間柄にある言語は、混ざり合ってしまうことが起きがちであるという点だ。というよりも、ウクライナ語とロシア語を(またベラルーシ語とロシア語を)完璧に使い分けることなど、ほぼ不可能と言ってもいいのではないだろうか。ウクライナ人がウクライナ語を話すときには、ロシア語の単語や言い回しがどうしても混じってしまうだろうし、逆に自分が正しいロシア語を話していると思っても、実は発音や文法などの面でウクライナ語の影響から自由ではないのである。ロシア語が無秩序に混じったウクライナ語のことを「スルジク(суржик)」と呼ぶが、ウクライナ中部・東部にはスルジクを常用している住民が特に多い。同じ現象はベラルーシにもあり、ロシア語混じりのベラルーシ語は「トラジャンカ(трасянка)」と呼ばれる。スルジクやトラジャンカは、無教養の象徴として知識人からは嫌われるが、案外そういうものこそ、本当の意味での国民語なのかもしれない。



ロシアNIS貿易会とは?ロシアNIS貿易会は、日本とロシア・NIS諸国との経済関係を促進するために活動している団体です(NISとは、旧ソ連から独立したウクライナ、中央アジアなどの新興独立国を指します)。このコーナーでは、ロシア地域のスペシャリストである同会のスタッフが持ち回りで、バラエティ豊かなエッセイをお届けいたします(同会につき詳しくは、<http://www.rotobo.or.jp>)。